



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 2 月 27 日 (木)

発行 館長 加藤 智 一

完璧帰趙



2025. 2. 23 朝日新聞「日曜に想う」(編集委員 佐藤武嗣)に司馬遷の「史記」廉頗藺相如列伝(れんぱりんしょうじょ)に登場する、「完璧」の語源となったエピソードが紹介されていました。以下ザックリと内容紹介。

『趙の国の恵文王(けいぶんおう)は、「和氏の璧(かしのへき)」という、宝の玉を持っていました。秦の国の昭王(しょうおう)は、その「璧(へき)」をなんとかして手に入れたいと思っていました。ある日、昭王は趙に使者を送り、「和氏の璧」と「15の都市(城)」とを交換するよう申し入れました。秦は大国、へたに拒めば秦軍が攻めて来るかもしれない。しかし恵文王はその申し入れを信用することができませんでした。

そこで恵文王は重臣を集めて相談します。すると藺相如(りんしょうじょ)という者が「使者として秦に行くのにふさわしい者は私の他にはいません。私を使者として秦に派遣してください。申し

入れどおりに 15 の都市(城)が手にはいれば「璧」を置いてきますが、都市(城)が手に入らないときには無傷のまま「璧」を持ち帰ってきます。」と言いました。

藺相如は「璧」を持って秦へ向かいます。

藺相如が「璧」を差し出すと、昭王は大喜び。

しかし、「15の都市(城)と交換する」という約束のことに關しては、全く知らん顔で、侍女らに「璧」を回して喜んでいました。

その様子を見ていた藺相如、「その璧には小さな傷があるので、それを王様にお教えします。」と言って、「璧」を取り返し、部屋の後ろの柱のところまで下がって言いました。

「恵文王は、あなたに敬意を表して、私に「璧」を持たせ使者としてつかわせましたが、あなたは「璧」を手にしても 15 の都市(城)と交換するという約束を果たす意思がないものと見受けられます。それゆえに、「璧」を取り返しました。もし、このことをお許しにならないのであれば、私は自分の頭とともにこの璧を柱に打ち付けて砕いてしまいます。」と、正に「怒髪天を突く」勢いで憤りをあらわにします。それを聞いた昭王は、驚いて「約束は守る」と言いましたが、藺相如は、もはや信用することはできないと確信し、家臣に璧を持たせ趙に帰らせました。

「璧」は、完全なまま恵文王のところに戻り趙は窮地を脱した。』という話です。

大きな力を持つ者が、不条理にも身勝手に振る舞うとき、弱者は従うしかないのでしょくか。毛利元就の「三本の矢」じゃないけれど、たとえ小さな力でも、集まれば大きな力になります。こういうときこそ、小さき者たちは、媚び諂って自己の利益を確保するよりも、全体の正義を優先して団結すべきでしょう。長い目で見たら、その方が絶対良いって!! お互いに。化石燃料をバンバン掘って、大量に供給できたとしても、世界の潮流が化石燃料を必要としない社会になっていけば、いくら生産できたとしても売れませんよね。甘い言葉と脅しに乗って、大儀を見失わないようお願いしたい。

「勇氣とは、

恐れを抱きながらも

前に進むこと」